

涼州詞

王翰
之
渙

黄河遠く上る白雲の間

一片の孤城万仞の山

羌笛何ぞ須臾楊柳を怨む

春光度らず玉門関

【作者】王之渙（六八八〜七四二年）盛唐の詩人。字は季陵（きりよう）。山西省新絳（しんこう）郡の人。一時役人をしたことも

あったが生涯の大部分を在野で過した。王昌齡、高適と親しく辺塞詩人として有名である。

【語釈】*出 塞：塞は国境にある要塞 とりでを出てさらに異国に敵を征伐にゆくこと 楽府の題名で涼州詞ともいう

*萬 仞：中国古代の高さ・深さの単位（八尺・七尺・四尺・五尺六寸などの諸説があるが七尺説が有力）幾万尺のこと
とで高くそびえる山を形容していったもの *羌 笛：西方異民族（胡人）の吹く笛で今のタンゴート族

*何 須：する必要はない *楊 柳：ここでは折楊柳（別れの曲）の意 *玉門関：敦煌の西にあり 中
国から西に向う 国境にある関所（今の甘肅省）

【通釈】黄河は、はるか遠く白雲のただよう夷（えびす）の地にさかのぼって流れ、そのかなたには一つの城塞が高くそびえる山々の
のいただきに立っている。この異郷の孤城で兵士らの心にひびいてくるのは、別れを怨む折楊柳の曲だ。だが胡人の笛でな
にもそんな悲しい曲などを吹くこともあるまい。春の光は玉門関をこえてここまでさしこんでこないのだから楊柳の芽生
えることなどあろうはずがない。と、王翰の涼州詞と一脈相通する兵士の心情を描き出している。